



## 培われた「橋渡し役」の経験 グローバル時代の街づくりに活かす

東山 正希さん 山梨県観光部国際観光交流課国際交流担当  
Masaki Higashiyama

文化や習慣の異なる途上国の地で学んだのは、価値観の違いがあっても、それを理解し橋渡しする人がいれば乗り越えられるということ。JICAボランティアの2年間は、外国人との交流が盛んになりつつある故郷で、誰もが暮らしやすい街づくりの原動力になっている。

### 子どもの頃からの夢が 今につながっている

東山さんが故郷の山梨県庁に就職したのは、日系社会青年ボランティアでの経験がきっかけだった。

「日本とは異なるインフラ環境や文化・習慣に触れたこと、また外国人というマイノリティとして生活したことで、生まれ育った場所で『暮らしやすい街』『わくわくする街』をつくりたいと思うようになったんです」

10歳のとき、テレビで見た青年海外協力隊のキラキラした表情に憧れて国際協力の仕事を目指すようになり、大学では国際関係学を専攻。同時に、海外で生きるスキルを得ようと、日本語教師

の養成講座を受講し検定試験にも合格。都内の国際交流協会では外国籍の子どもたちに日本語を教えるボランティアもした。満を持して応募したJICAボランティアに、大学在籍中に合格、ドミニカ共和国の日系日本語学校に派遣となった。

### わくわくする仕掛けづくりで 課題解決の方法を学ぶ

中南米の国には、戦後、日本から移住した日系人のコミュニティがある。そこに派遣されているのが日系社会青年ボランティアの日本語学校教師だ。日系人の子どもたちが通う日本語学校で、日系人としてのアイデンティティを形成する

ための継承日本語教育を行っている。東山さんも、首都サントドミンゴを拠点として、全国各地にある日系日本語学校で日本語教育と現地教師への指導を行った。

継承日本語教育では、子どもたちのモチベーション維持が重要だった。ドミニカ共和国で日本語を使う必要性はないし、いまの子どもたち（日系3世）の





窯焼きピザにチャレンジ。自身が「わくわくする」ことを地元の観光促進に繋げる。



白州・尾白の森水公園「べるが」のリニューアルセレモニーで、同僚の国際交流員とともにサイクリングの楽しさをアピールする東山さん。



県庁での執務中の様子。事務仕事も多岐にわたる業務の中で重要な要素。

親（日系2世）も、ほとんどが日本語を話せない。留学するならアメリカのほうが文化的にも近く、言語の習得も楽。そういう環境でなぜ日本語を学ぶのか。

「私は仲間と共に、移住学習に力を入れました。日系1世の人に移住の話をしてもらったり、その話を自分たちなりにまとめさせたりして、日本語を学ぶ意義を子どもたち自身に見出してもらったんです」

また、宿題の「やらされている感」をなくすため、いまの自分に必要なこと、やりたいことを自身で考え、宿題を自分で考えさせることにした。その結果、宿題の提出率が100%近くになったという。さらに「きょうだい学級」として、たとえば6年生が1年生に教える機会をつくった。お兄さんお姉さんが教えてくれるのは教わる側にとって新鮮で楽しいし、教える側にも勉強になる。教える楽しさを知った子どもたちが、学校の手伝いをしてくれるようになったことも収穫だった。

「こうした活動から得たのは、『わくわくする』ことの大切さ。自分自身の仕事も『やらされている感』をなくしてモチ

ベーションを維持し、課題が生じても工夫して解決に近づけることを学びました。必死で工夫し得たこの経験は、どんな仕事にも応用していけると思います」

異なる文化を持つ人たちをつなぎ  
みんなが暮らしやすい街を  
つくりたい

帰国後は、JICA ボランティアの日本語教育職種に関する仕事を経た後、復興庁の仕事で陸前高田市へ。防災関連の業務では、地域に住む外国人でもわかりやすいよう、標識や情報を伝えるために適した言い回しを考えるなど、日本語教育の視点が役に立った。また、ここでの経験は今の仕事につながっている。

2017年からは山梨県の県庁職員になり、観光部国際観光交流課で国際交流を担当。メイン業務は山梨県の姉妹都市であるブラジル・ミナスジェライス州と、農業等に関する協定を結んだインドネシア・ジョグジャカルタ特別州との交流事業、海外技術研修員受入事業、海外県人会の活動促進などだ。

また、多文化共生推進協議会の運営

### 東山 正希さん プロフィール

山梨県出身。大学在学時に日本語教師養成講座に通い、卒業後の2013年から2015年まで、日系日本語学校教師としてドミニカ共和国へ。帰国後、JICA青年海外協力隊事務局、復興庁復興支援専門員（岩手県陸前高田市役所配属）を経て、現在は山梨県庁で国際交流事業を担当している。

にも携わり、外国人がとくに多く住む集住地域の市町村や国際交流協会の連携を促進している。

「ドミニカ共和国人、日系人、日本人ボランティアが、それぞれの文化や習慣をもって生活している中で過ごし、異文化で暮らすことの苦労や、誰もが暮らしやすい街づくりの難しさを知りました。一方で、文化や習慣などに違いがあっても、それを説明できる人がいれば理解が広がることもわかりました。県庁の仕事でも、山梨県に住む日本人と外国人、異なる文化や慣習を持つ人たちをつなぐ『橋渡し役』となり、みんながわくわくする、暮らしやすい街づくりを目指したいですね。さまざまな視点から『街』について考えることができる、やりがいのある仕事に就けて感謝しています」

## 東山さんへの エール！

山梨県国際観光交流課  
総括課長補佐  
安藤 克美さん



### 海外での経験を生かしてもらいたい

国際交流担当は、山梨県庁では新人が配属されることの少ない部門ですが、東山さんの場合は海外での経歴が評価されたのだと思います。実際、経験が活かすことのできる仕事で、非常に真面目に取り組んでくれています。ただ、県庁の仕事は多様なので、将来的には他分野の仕事も経験してもらいたいし、それができる人材だと期待しています。